

世界農業文明の盛衰

真逆な遺産残す西進と東進

土壌と農業が古代国家の成立要件の根幹だったことは中国の歴代皇帝が行った儀式「社稷壇（しゃじやくだん）」にも表

現されている。社稷壇は北京の中山公園にあるが黄、黒、青、赤、白の五色の土が黄色を中心に配置し四方に敷き詰められている。この五色の土は中央に鎮座する皇帝と四方の守護神、中国とその周辺の地域に分布する五色の土と五種類の穀物

国発祥の地である中原の黄色土、黒色はモンゴル・興安嶺を越えてシベリア低地に広がる草原土壌、青色は黄河・揚子江河口に広がる低地土壌、赤は雲南を越えて亜熱帯に広がる強風化土壌、白色はタクラマカン砂漠から中央アジア乾燥地の砂漠土壌を示している（小崎隆「世界の土壌はいまあなたと一緒に考えた

が青、タカキビ（モロコシ・コーリヤン）が赤、コムとダイスが白にあてられている（井上直人「おいしい穀物の科学」講談社ブルーバックス、2016）。すなわち多様な土の上で多様な作物が栽培でき、人民が飢えないことが国家の理想とされ

「五穀」を象徴している。土の色の黄色は古代中

が黄色、ソバが黒、ムギ

河川管理が最も重要

中国においては黄河中流域においてアワやキビなどの雑穀の栽培が1万年以上前に、揚子江（長

2015.11、岩波書店）。

五穀の色はキビ・アワ

中国においては黄河中流域においてアワやキビ

ができた。なお中国では

東北部の遼河流域で86

が黄色、ソバが黒、ムギ

河川管理が最も重要

中国においては黄河中流域においてアワやキビ

00年ほど前から半農半牧の遼河文明が栄えたが4200年ほど前から氣候が乾燥し土地が砂漠化したため、この文明を支えていた人たちは黄河文明地域に移動したと考えられている。

世界のその他の文明についても以下にその発祥と盛衰を概観してみる。

インダス文明は、インド、パキスタン、アフガ

ニスタンを含むインダス川流域で4600年前から3800年前までの間に栄えた文明であり、メソポタミア文明とも交流を持っていた。農業は河川の氾濫地で行われ、コブウシなどの牧畜も行われていた。しかし氣候変動によって乾燥化が進んだことにより滅亡した。

エジプト文明は、メソポタミアからの農耕文明

の伝播により、ナイルデルタで7000年ほど前に始まった。エジプトでの農業はナイル川が運んだ肥沃な土壌の上で行われたため、1964年にアスワン・ハイ・ダムが建設されるまで継続することができた。ダムの建設後は化学肥料への依存と土壌の塩類化により農業環境が破壊されてしまった。

マヤ文明の絶頂期

中米(メソアメリカ)では4000年ほど前にトウモロコシが栽培化された。その後、ユカタン半島を基盤をおいたマヤ族の人々は紀元前2世紀には階層制社会をもつ都市国家を形成した。マヤ文明が絶頂期に達した紀元600年から900年頃には人口が500万人



古代農耕文明が栄えた地域 1メソポタミア、2インダス、3エジプト、4ギリシャ、5ローマ、6黄河中流、7長江中下流、8アステカ、9マヤ、10インカ、11アマゾン(モホスおよびテラプレタ)

から600万人に達していたと推定されている。これら地域の農耕は焼畑農業として始められた

が人口増大に伴い定常化していった。マヤ文明では家畜を飼っていないので家畜糞による

開催地 : 長
 播種日 : 20
 定植日 : -
 審査日 : 20
 特長
 「白老早生」
 ~5月播種は
 広く、見栄え
 緑色で色抜い
 「白老早生」
 い。株張りよ
 枯れ上がりは
 ▽問い合わせ
 ※「pick up 優良

養分補給も行われなかつた。そのため土壌肥沃度の低下と土壌侵食の進行に伴い、紀元1400年頃には都市国家も農地も放棄されてしまった。

北部から移動してきたアステカ人が紀元1325年頃メキシコ盆地に定住し、その後テノクチトランを首都として新しい国家を建設した。この国家における農業生産は湖や湿地に浮島を作り、トウモロコシ、豆、アマランス、市場向けの野菜などを栽培した。

この方法はチナンパ農業と呼ばれ、肥沃度の低下を伴わない持続的な農業形態であり、約120km²で10万人の食料を供給することができた。しかしこの文明はスペインの侵略により1521年に滅ぼされてしまった。

南米ペルーでは5000年前から3500年前に建設された沿岸部のカラル遺跡を皮切りに、海岸部と高地に次々にさまざまな文明が栄えてきた。標高3800mのチチカカ湖の周辺に住む人たちはリヤマやアルパカなどアンデス特産の家畜を飼いい、ジャガイモやキヌアなどを栽培し、さらに15日から20日をかけて山を下り海岸地帯に移動し、寒い高地ではできないトウガラシやトウモロコシなどを栽培していた。

アンデスのグアノ

作物の肥料は、家畜の糞や沿岸の島で採れる海鳥の糞の化石グアノを利

用した(古代アンデス文明を築しよう―特別展 古代アンデス文明展 オフィシャルガイドブック 2010)。彼らは土壌肥沃度を間作、マメ科植物を含む輪作、休耕、堆肥と灰の利用によって維持した。

地域に密着した土壌分類システムを持ち、種まきの前に土を耕さず、極力土をかき回さないようにしていた(デイビッド・モントゴメリー「土の文明史」築地書館 2010)。最終的にアンデス文明を支配したインカ帝国は1533年にスペインによって滅ぼされた。

水草が農耕地の肥料

本連載17回目でアンデス川中流から下流域にテラプレタという人工的に炭を加えて作られた農地で永続的な農業が行われていたことを紹介した。これに加えて、アマゾン川の源流部の一つであるポリビアのモホス大平原でも紀元前2000年頃から高度な農耕文明が栄えていた(実松克義「アマゾン文明の研究」現代書館 2010)。

モホス大平原は盆地状の地形のため、アンデス山脈の雪融け水を集め1年の半分は巨大な浅い湖となってしまう。そこに古代人は土を盛り上げた島状の農耕地と居住地を作り、それらを結ぶ直線的な道路兼堤防を構築した。堤防沿いには運河や貯水池も作り水を管理した。農耕地の肥料に水草

などを用いるなど、環境調和的なものであった。テラプレタとモホス大平原での人工農地は多くの栽培作物(キャッサバ、カボチャ類、インゲン豆、落花生などの豆類、グアバ、パイナップル、タバコ、綿等)の原産地となった。トウモロコシやバレイショもアマゾンにあった原産をアンデス高地人が移植、品種改良した可能性がある(実松克義、同上)。

地球半周して出会う

栽培植物のなかにはアンデス高地を起源地とされているものも多いが、アマゾン川流域の方が土壌も肥沃で気温も高く、多様な栽培植物の起源地として適している。またアンデス高地との人と物の交流も大河とその支流を通じて容易に行われたと考えられる。これらのアマゾン農業文明もスペイン人の征服および侵略者によってもたらされた疫病の蔓延によって滅ぼされてしまった。

ホモサピエンスがアフリカを出たあと、西に進んだ文明は一貫して土地収奪的なものであった。これに対し、東に進みベリリング海峡を渡り最終的に南アメリカまで移動した人々の農業は環境調和的でエコロジカルなものであった。

両文明が地球を半周して出会うことによりエコロジカルな文明を守ってきた人々とその知恵と伝統文化が滅ぼされ彼らが残した自然と土地の遺産までもが大規模開発によって破壊されていることは悲惨なことである。